H28地域協働研究（地域提案型・前期）

RR-09「老人クラブ活動の活性の方策に関する実証的研究」

課題提案者：盛岡市老人クラブ連合会
研究代表者：社会福祉学部　菅野道生
研究チーム員：嵯峨直樹（盛岡市老人クラブ連合会）、吉田一彦（盛岡市長寿社会課）

＜要　旨＞

本研究では、盛岡市における「老人クラブ活動の停滞・不活発状態、及びそれに伴う高齢者の社会参加機会の減少」という地域課題を踏まえ、高齢者の社会参加ニーズの実態把握・分析を通じて、求められる老人クラブ活動のあり方と、市町村高齢者保健福祉行政による高齢者の社会参加活動支援のあり方をモデル的に提示することを目的に取り組んだ。既存の活動事例の分析と、老人クラブ活動の「参加予備軍」である50-74歳の一般住民人へのアンケートを通じ、「住民ニーズにこたえる老人クラブ」像をモデル的に描き出そうとするところに独自性を有している。調査結果からは、老人クラブ活動のキーワードとして「健康づくり」や「ウォーキング」を前面にだすことが、未加入の住民のニーズにこたえるために効果的であることが示唆され、こうした住民のニーズを踏まえた老人クラブ活動の展開を考えていくことが必要といえる。

1　研究の概要（背景・目的等）

現在、高齢者の増加にともない、介護等を必要とせず元気に生活できる健康寿命と、平均寿命の間を埋める取組が待ったなしの課題となっている。そのためには、高齢者が自ら社会に参加し、生きがいを持って生活できるための仕組みと、それを支える日常生活支援や地域のネットワークの構築等が重要となる。しかし従来その役割を中心的に担ってきた老人クラブ活動の停滞が全国的な課題となっている。老人クラブが今後も高齢者の社会参加の受け皿として機能していくためには、人々のライフスタイルの多様化や意識の変化にも対応しながら活動のあり方を見直し、「新たなコミュニティ組織」としてのその活動をリニューアルしていくことが求められている。

老人クラブ活動については、その活動実態や課題について明らかにしようとする研究が数多く取り組まれてきている。古くは1950年代後半から60年代はじめには高度成長を背景として都市部を中心に老人クラブ活動の在り方が盛んに論じられた時期があった。この時期すでに「老人クラブの新段階をめざして」（矢内1957）や、「行き詰った老人クラブ」（磯村1965）など、旧来の老人クラブの在り方を反省し、新しい活動スタイルの方向性について議論されていた。近年では、高齢化の進展のなかで高齢者の社会参加が課題となるなかで再び老人クラブ活動にスポットライトがあてられるようになっている。特に2000年の介護保険施行以降は、介護予防活動との関係で老人クラブ活動の役割に言及する研究が急増している状況にある。これらの先行研究の多くは、基本的に老人クラブ役員や会員を対象として収集したデータに基づく研究となっている。しかし、活動に参加が見込まれる若い世代、あるいは対象年齢であるにも関わらず老人クラブ活動に参加しない高齢者を対象にそのニーズを分析することなしに、今後の活動の方向性は見えてこない。こうした研究上の課題に対して、大学、行政、老人クラブ連合会という三者の協働によって、より実証性と実効性を持った調査研究に取り組もうとするところに本研究の意義がある。

2　研究の内容（方法・経過等）

本研究の基本視点は、老人クラブのイメージや加入意向、関心のある活動内容等の特徴について、現時点での加入・未加入別、年齢階層別に分析し、住民のニーズにこたえる老人クラブ活動のあり方について検討することにある。

上記の視点に基づいて、岩手県立大学と盛岡市役所，盛岡市老人クラブ連合会が協働で地域住民に対するアンケート調査を実施し、そこで得られたデータを分析対象とした。

調査対象者は、岩手県Ａ市に居住する、（基準日平成28年４月２日）50歳から84歳の男女2,000人の住民である。住民基本台帳から上記の年齢を基準に無作為抽出によって抽出し、調査対象者リストを作成した。調査方法は郵送法による自記式アンケート調査である。調査の実施時期は，2016年12月～2017年１月である。調査票の有効回収数は991票，最終的な有効回収率は49.6%だった。調査実施にあたっては、岩手県立大学研究倫理規定に則り、倫理的配慮につとめた。

3　これまで得られた研究の成果

（１）老人クラブへの加入状況、及び加入条件

まず老人クラブへの加入有無に関しては、「60歳以上だが、加入していない」が58.7%と最も多く、「まだ、加入年齢（60歳以上）に達していない」が34.7%、「加入している」が6.2%という結果であった。「加入年齢に達していない」や「加入していない」と回答した人に対し、老人クラブやその活動について知っているかどうかを質問したところ、「老人クラブの存在は知っている

が、活動内容については知らない」が52.8％、「老人クラブの存在も活動内容も知っている」が23.5％、「老人クラブの存在も活動内容も知らない」が14.2％という結果であった。老人クラブへの加入意欲については、「わからない」が49.4％、「加入しようと思わない」が32.7％、「加入しようと思っている」が11.4％の順となっており、加入意欲のある人が１割に留まった。

表１　老人クラブへの加入有無

老人クラブへの加入有無	度数	%
加入している	61	6.2
まだ、加入年齢（60歳以上）に達していない	344	34.7
60歳以上だが、加入していない	582	58.7
無回答	4	0.4
合計	991	100.0

最も多かったのは「人間関係がわずらわしいから」の17.6％。次いで、「家事や仕事で忙しい」が12.2％、「活動内容がわからないから」が11.9％、「他のサークルや同好会で十分だから」が7.3％という順になった。

また、どのような条件があれば加入しようと思うかについて質問したところ、「活動内容に魅力があれば」が24.5％と最も多く、「時間的な余裕があれば」が17.2％、「健康上の問題がなければ」が10.8％、「友人や知人といっしょであれば」が7.9％という順となった。

（２）関心のある活動メニュー

老人クラブへの加入有無別に関心のある項目の特徴をみると、「ウォーキング」は、加入者で62.7%、未加入者でも73.1%で加入有無にかかわらず関心が明らかに高いことがわかる。未加入者の関心の特徴としては、「ウォーキング」の他に「公園などの清掃活動」や「旅行」「お祭り」などの項目で比較的関心が高くなっていた。「グラウンドゴルフ」や「輪投げ」などの軽スポーツは、加入者では関心が高いが、未加入者で関心を持っている人は加入者の半分程度となっている。また「お茶会」、「旅行」、「公園などの清掃活動」等の項目は加入者では他のグループに比べ関心があるとの回答割合が高く、加入・未加入の違いによる関心の差が大きい。

表２　加入有無別にみた関心のある活動

		老人クラブ加入有無							
		加入している		加入年齢未達		60歳以上だが、加入していない		合計	
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
関心のある活動	グラウンドゴルフ、輪投げなどの軽スポーツ	29	49.2%	59	23.3%	108	24.4%	196	26.0%
	ウォーキングなどの健康づくり	37	62.7%	191	75.5%	324	73.1%	552	73.1%
	ひとり暮らしの高齢者の自宅への訪問活動	12	20.3%	42	16.6%	65	14.7%	119	15.8%
	身体等が不自由な方の家での清掃、除草、除雪など	14	23.7%	46	18.2%	77	17.4%	137	18.1%
	老人ホームなどへの施設訪問	11	18.6%	30	11.9%	66	14.9%	107	14.2%
	お茶会などの近隣住民で集まる活動	28	47.5%	38	15.0%	84	19.0%	150	19.9%
	地域の公園などの清掃活動	30	50.8%	65	25.7%	158	35.7%	253	33.5%
	子どもの登下校時の見守り（スクールガード）など	21	35.6%	74	29.2%	103	23.3%	198	26.2%
	子どもに昔の遊びを教えるなどの伝承活動	18	30.5%	45	17.8%	63	14.2%	126	16.7%
	地域やサークルでの旅行	37	62.7%	44	17.4%	124	28.0%	205	27.2%
	地域でのお祭りなど	35	59.3%	66	26.1%	115	26.0%	216	28.6%
	シルバー人材センターなどを通じた就労	12	20.3%	70	27.7%	114	25.7%	196	26.0%
	合計	59	100.0%	253	100.0%	443	100.0%	755	100.0%

（３）老人クラブに対するイメージ

調査では老人クラブのイメージについて「明るい／暗い」「かたい／やわらかい」「おもしろい／つまらない」等の7項目を設定して、自分がどのようなイメージを持っているかを回答してもらい、加入状況別、年代別の分析を行った。その結果、未加入で年齢の若い人ほどイメージが悪く、未加入で年齢の高い人、老人クラブ加入者ほど良いイメージを持っている事などが明らかとなった。

（４）考察

これらの調査結果から見えてきたことをまとめると、おおむね下記のようである。まず、関心のある活動では加入者・未加入者ともに「ウォーキング」が共通して高いポイントを示した。活動を広報していく上では、キーワードとして「健康づくり」「ウォーキング」等を前面にだすことが効果的であると考えられる。これらの活動は、子どもや若年層の参加も得ることで多世代交流にもつなげていくことも可能であり、老人クラブ活動の取り組みとしてこうした活動を強化していくことが求められる。

一方で、老人クラブのイメージについての分析からわかることは、端的に言えば加入者をはじめ老人クラブ活動についてよく知っている人はよいイメージを持っており、知らない人は逆のイメージを持つ傾向にあるということである。老人クラブは、「具体的に知っているかどうか」によってイメージが大きく左右される組織であることが示唆されたといえる。地域のなかで一般の住民に、その活動内容をいかに具体的に知らせていくことができるかが、活動の活性化のカギとなる。

４　今後の具体的な展開

本研究は、盛岡市老人クラブ連合会、盛岡市長寿社会課との協働研究として取り組まれた。研究結果は今後の老人クラブ連合会による活動方針の策定や、行政における施策づくりに反映させていくこととなる。

その際のポイントとしては、グラウンドゴルフや訪問活動等、従来の活動メニューに加え、ウォーキング等による健康づくりをひとつの柱とすることや、そうした活動に幅広い年齢層の参加を拡げることを通じて、地域で「顔の見える老人クラブ」となっていくことも望まれる。

本調査の結果を、各単位クラブにフィードバックする機会をつくりながら、データに基づいた老人クラブ活性化に向けた施策づくりに取り組んでいくことが今後の課題である。

５　その他（参考文献・謝辞等）

本研究は平成28年度地域政策研究センター地域協働研究(地域提案型)前期の研究成果の一部である。調査実施にご協力をいただいた方々に御礼申し上げます。